

シリーズ

“キラリ企業”

の現場から 第63回

当社の支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業”の現場から。第63回目は、創業時の精密板金加工業から、電子部品の実装装置で世界的メーカーに成長し、さらに新分野へと挑戦を続ける株式会社大橋製作所を紹介します。同社には城南支社の相談事業をはじめとする公社支援メニューをご利用いただいています。

技術革新への挑戦！開発装置で世界へ羽ばたく

株式会社大橋製作所

町の板金工場から世界の「OHASHI」へ

日本を代表する製造業の町大田区から、果敢にモノづくりに挑戦し世界へ羽ばたいた大橋製作所。同社は、大正5年、大橋正義社長の父正太郎氏が23歳のときに精密板金加工業で創業したのがはじまり。昭和34年、正太郎氏が急逝すると、氏の長男である正美氏と四女・茂子氏が父の遺志を継ぎ株式会社大橋製作所を設立した。10年後には末っ子の大橋社長が経営に参画し、その後代表に就任した。

現在同社は、小型液晶パネルや基板、ICチップなどの電子部品を実装する装置（ACF実装装置）の世界的なメーカーに成長している。本装置は電子機器、携帯電話、デジカメ等の各種モジュールを接合する装置で、液晶パネル産業の成長に支えられ大きく業績を伸ばした。同社の実装技術は折り紙つきで、自らの手で事業を展開し世界に通用する「OHASHI」ブランドを確立した。この実装装置関連事業部門の「機器事業部」と、精密板金・金属部品加工・受託開発等の「メタル事業部」の2部門がある。

自社に合った実効性のある戦略を

昭和54年、第二次オイル・ショックを機に同社の経営環境は一気に悪化。危機感を感じた大橋社長は、組織の近代化に向けて動くことを決意した。「まず、経営者が学ばなくては…」と中小企業同友会で経営の勉強に取り組み始めた。「経営者がなすべきことは何か」「経営環境の変化にどう対応すべきか」など、組織・人材・脱下請等について改めてとことん考える機会となり、戦略策定プロセスに則った「経営基本計画書・部門別計画書」も初めて作成した。

また、同社は平成13年よりISO9001（品質）、14001

（環境）、27001（情報）の認証取得に取り組んだ。これにより社内の意識改革や危機管理体制の構築ができたという。

大橋社長は「ISO取得後も現場に合ったシステムに作り変え、常に見直していく必要がある。経営計画書も同様で、最初から完璧なものを望まず自社に真に合ったものを作り上げることが重要」と話す。



大橋正義社長

再生のきっかけは自社製品開発

同社はバブル崩壊後に受注量が4割も減少した。この苦しい状況が続く中で、大橋社長は「お客さんからの仕事を待つだけではだめだ。自社製品を開発して市場を作ろう」と心に決めた。しかし、その後ゲーム機、アイデア製品、生ゴミ処理機など手当たり次第開発したがことごとく失敗。この時の反省から「組織力強化や人材確保・育成等の課題解決」と同時に、「従来の基盤を活かした自社製品開発で経営の自立化を目指す」という方向性を定め再び動き出した。

既に昭和59年に現在の実装装置の原型を開発していたが、熱圧着実装分野の将来性に改めて着目し、同分野に経営資源を投入することで有力な取引先の開拓に成功した。

平成11年には業界の常識を覆す卓上型COG（注1）実装機が日本経済新聞の「日経優秀製品・サービス賞」を受賞。これが再生のきっかけとなった。新規性の高い製品

だったため爆発的に売れ、これがその後会社の危機を救い飛躍の原動力になった。平成18年には世界初のフルオートFOB(注2)ラインの開発に成功、同社はACF接合実装機のフルラインメーカーに成長した。現在こうした製品は携帯電話等の世界トップ企業の生産ラインに採用され、アジア、北・中南米、ヨーロッパの各工場に設置されている。

新分野への展開・「数楽アート」誕生

好調な機器事業部に対し、金属板金加工を担うメタル事業部では仕事量が減少し下請からの脱却を模索していた。大橋社長も「現在の受注加工だけではエンドレスの価格競争が続き、事業部の発展もなく働く人も報われない。何とか作る側が価格設定できる自社製品を作りたい」と考えていた。



「数楽アートの作品」
PEGASUS I

平成21年6月、打ち合わせのため、ある大学の産学連携部門を訪れたときのこと。紙製の不思議な立体模型に目がとまり、「これはなんですか?」と質問すると、「関数が示す立体像です。これが金属で出来たらどんなに美しいことだろう…」と。その先生の一言で、同社の創業以来の社風でもある『挑戦心』に火がついた。「大学の先生を驚かせてみたい」、「日本の匠の技術を広く世に知らしめたい」という思いもあった。度重なるブレインストーミングと試行錯誤に明け暮れた日々であったが、失敗しても挑戦するという前向きな姿勢と努力が実を結び、同社の金属加工技術を駆使して誕生したのが「数式を“カタチ”にしたアート・オブジェ『数楽アート』」。数学の「2変数関数」を立体グラフ化したもので、関数が示す軌跡に沿って切断した数十枚のステンレス鋼板を格子状に組み合わせ創っている。

「数楽アート」が誕生するまでには、芸術に造詣が深い数学教育研究者、デザイナー、写真家、産業支援機関スタッフなどとの多くの出会いがあり、それにより開発部隊に「気づきと着想」が生まれ、新たな展開につながったという。そしてついに昨年9月、“答えのある美しさ”をキャッチフレーズに「数楽アート」全9種類20作品の販売を開始した。販売契約を結んだ大手書店での展示会やオンラインショップ、通販カタログでの販売のほかギフトショー等各種展示会にも出展。テレビ番組でも紹介されるなど徐々に認知度が高まっている。

また公社の中小企業ニューマーケット開拓支援事業(注3)の利用、東京都のトライアル発注認定制度(注4)の認

定商品に選定されたことなどにより販路拡大を目指す。

技術革新へのたゆまぬ挑戦

同社が開発した「光学樹脂ラミネーティング装置」。屋外で携帯電話を見ると光の反射や屈折などで画面が見にくくなるのを改善するため開発した製品である。電話のほかに、カーナビ等のLCD(小型液晶パネル)とカバーガラスやタッチパネルなどの間にUV硬化樹脂を封入することにより、画面の視認性の向上と液晶パネルの強度強化が図れる。現在の主力製品は本装置と従来からのACF関連装置で、全世界で好調に売り上げを伸ばしている。しかし、同社は常に先を見据え技術革新の追求に怠りはない。

今後も新たな方向性を模索しながらさらに製品開発や事業展開に力を入れる。LED分野への進出やメタル事業部の研究開発型への転換などを熱心に説明してくださった大橋社長。「3年後また来てください。きっと変わっていますから」と笑顔で言い切った。その



光学樹脂ラミネーティング装置

信念に揺るぎはない。新規分野への果敢な挑戦に夢と期待が大きく膨らむ。近い将来、同社はコア技術を活かしさらに大きく飛躍しているに違いない。着々と次の段階へと歩みを進める大橋製作所の挑戦に、これからも目が離せない。

(城南支社 大坪美枝子)

- (注1) Chip on Glassの略で、駆動用ICを液晶表示用ガラス基板に実装する形式。
- (注2) フレキシブル基板(FPC)を硬質基板(Board)に実装する形式。
- (注3) 「ビジネスナビゲータ」の豊富な企業ネットワークや市場情報等を活用して、中小企業の製品や技術を商社やメーカー等へ積極的に紹介。国内の販路開拓を進める。
- (注4) 中小企業の新規性の高い優れた新商品の普及を応援するため、都が新商品を認定してPR等を行うとともに、一部を試験的に購入し評価する制度。

企業名: 株式会社大橋製作所
 代表者: 大橋 正義
 資本金: 9,600万円 従業員数: 99名
 本社所在地: 東京都大田区大森南3-1-10
 TEL: 03-3744-5351
 FAX: 03-3744-5749
 URL: <http://www.ohashi-engineering.co.jp>
<http://www.sugakuart.com>